

---

# 東方ファンタジー？

未来組

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方ファンタジー？

### 【Nコード】

N3066T

### 【作者名】

未来組

### 【あらすじ】

アドメントチルノ  
東方をFF？風にしてみました。よろしければどうぞ

(とりあえず紅魔郷まではやります)



チルノ「イタツ！くく、？っていな！」

藍「とりあえず今敵対関係なのは、紅魔館組と風見幽香、地底の3つだ。次に友好関係にあるのは人里、永遠亭、妖怪の山の3つで残りでは中立組だ」

チルノ「そーなのか」

藍「ハア、まったく・・・今回の任務だが紅魔館の悪魔達がまた異変を起こしたみたいでな、また霧を発生させているみたいなんだ」  
チルノ「それで？」

藍「かつての幻想郷なら別に問題はなかったんだが、今はまだついこの間起こった事件の混乱から快復しないうちに起こった異変。至急解決する必要がある」

チルノ「事件って・・・地底組との戦いだっけ」

藍「そうだ、君は参加していないがソルジャーの初めての実戦投入」

藍「その結果見事私達森羅カンパニーが勝利しこの新しい幻想郷の覇権を手に入れた」

チルノ「・・・」

藍「恐らくまだ新しい幻想郷での暮らしになれないが故にストレスが溜まった結果の行動だとは思いますがストレス発散の為とはいえ、他を巻き込むのは見逃す訳にはいかない。ソルジャーチルノはコレを解決してもらおう、わかったな？」

チルノ「リョーカイ！まつ、サイキョーの私が行くんだから泥船に乗ったつもりでいなよ」

チルノブリーフィングルーム退室

藍「それをいうなら大船だ、・・・大丈夫なのか」

## プロローグ（後書き）

現在のチルノ

ソルジャークラス：2nd

LV8

装備

武器：あたり剣

服装：チルノのワンピースに両肩に肩当て装備（ソルジャーの服をイメージ）

チルノのイメージ：クラウドの要素を持ったザックス

配役

藍：ツオン+CCFF?のリザード

世界感（前書き）

補足説明です

## 世界感

幻想郷が現在のようになるまで

外の世界の全人類突然死亡（原因不明） 博麗大結界がその意味を失い消滅 幻想郷の住人大パニック 八雲紫、永琳、幽々子などと協力して事態の収集を図る とりあえず成功 その後一部の妖怪や妖精、人間などに異常が起きる（一部の者を除いてほぼ全ての存在が空を飛べなくなる、妖怪達は人食しなくなる、博麗霊夢の弱体化など） 外の世界の技術の導入により幻想郷の文化レベルが急激に上昇、この時八雲紫は森羅カンパニーを設立する 地底の一部の妖怪達が自らのアイデンティティの消滅に恐怖し、暴走 八雲紫、この騒動を治めるため当時試験運用段階だったソルジャーを実戦に導入する 地底と森羅の争いが激化するものの最終的には森羅カンパニーの勝利となる、これにより森羅カンパニーは人里から圧倒的支持を得る 紅霧異変ふたたび いまここ

新・東方紅魔郷：1話目（前書き）

まだ本格的には始まりません

## 新・東方紅魔郷：1話目

ブリーフィングルームを出たチルノに1人の人間の男性が走ってきた

「おい、チルノー！」

チルノ「あつ、カANCELセルじゃん。どうしたの？」

カANCELセル「どうしたのって、今回の任務は俺とお前の二人でやる事になったからだよ」

チルノ「ふーん」

カANCELセル「とりあえず早く森羅列車へ急ぐぞ、任務の内容は聞いてると思うが作戦内容は知らないだろう？」

チルノ「まあね」

カANCELセル「詳しい事は列車に乗ってから話すから早く行くぞ」

チルノ「ラジャーす！」

駅へ向かう途中

「お札ー、お札いらんかねー」

チルノ「悪いけど急いでるから！」

カANCELセル「おい、はやくしろー！」

チルノ「今行くわよ！」

「・・・なかなか売れないわね、困ったわ・・・」

森羅列車D58内

カANCELセル「ハア、ハア・・・何とか間に合ったな・・・」

チルノ「ヒイ、ヒイ・・・普通、こーゆーのって特別な車両とか使  
うもんじゃないの?！」

カANCELセル「そんな事したら目立つだろ。さっさと終わらせる為にも  
道中目立たないようにするのも必要なのさ」

チルノ「ふーん、そーなのかし」

カANCEL「（イラッ）・・・作戦内容を話すその前に、ホラコイツを受け取っとけ」

チルノ「これってトマトジュース？」

カANCEL「喉が乾いたら飲むといいさ」

チルノ「あたいはトマト嫌いなんだけどな」

カANCEL「作戦内容だがこのまま森羅列車で紅魔館の近くまで行き、そこで降りる」

チルノ「降りるつたて、あの辺駅ないじゃん」

カANCEL「飛び降りろ」

チルノ「ひでえ」

カANCEL「（無視）その後は歩いて接近、その後1人は陽動して、もう1人が侵入この異変を解決してもらおう」

チルノ「勿論、あたいは異変を解決する方よね」

カANCEL「そういうと思った、じゃあ俺は陽動か・・・しくじるなよ？」

チルノ「ダイジョーブ、ダイジョーブ。あたいに任せなつて！」

チルノ「・・・昔はみんな空飛べたのになあ・・・」

カANCEL「どうした？」

チルノ「いや、昔は空飛べたのにつて」

カANCEL「まあ今じゃ鴉天狗ぐらいしか飛べなくなつたからな・・・」

チルノ「むっ！あたいだつて飛べるわよ！」

カANCEL「あれは飛ぶというより浮くだろうに」

チルノ「うぐう・・・」

カANCEL「おっ、そろそろだな。降りる準備するぞ」

チルノ「ハイハイ、わかったわよ」

森羅列車の屋根の上

カancellor「よし、行くぞ！」

チルノ「じえろにも」！



## ソルジャーについて(前書き)

内容を東方求聞史紀風にしてみました

## ソルジャーについて

『ソルジャー ー 森羅カンパニーの切り札』

主な危険度 普通

遭遇頻度 高

多様性 高

主な遭遇場所 どこでも

主な遭遇時間 いつでも

### 特徴

森羅カンパニーに所属している戦士達の事

博麗大結界の消滅のさい、一部の妖怪の暴走などを懸念し、妖怪の賢者と永遠亭の薬師などが協力して開発した技術により驚異的な身体能力を手に入れた者達である。

ソルジャーになる為には幾つかの試験があり、その中のどれか一つでもパス出来なければ即失格という狭き門がある ( 1 )

ソルジャーになった者は驚異的な身体能力ともう一つ『疑似魔法 ( 2 )』が使えるようになる。使えるようになる理由は教えてもらえなかった為一切不明であり、ソルジャーになれば魔法が使えるとしかここには書けない

また、ソルジャーにはランクがあり3rd、2nd、1stとあって数字が小さい程強いそうだ

この中でもクラス1stに至っては幻想郷最強クラスとして恐れられている ( 3 )

### 主な仕事内容

博麗大結界の消滅後、一部の動物達の巨大化や暴走に対処したり、稀にだが任務として異変解決を命じられる事もある  
人々の生活の為、日夜巨大ガエルを退治したり、突然変異した妖怪の討伐（４）をしている

今の所判明しているソルジャー達

クラス1st

フランドール・スカーレット

西行寺幽々子

レティ・ホワイトロック

クラス2nd

チルノ

カンセル

1：あの氷の妖精がソルジャーになった事から学力は問題ではないと思われる

2：本人の資質に依存するようで氷の妖精が氷と水属性しか使えず、カンセルさんは風属性の魔法しか使えないらしい

3：現在三人の内二人は行方不明で一人は辞職しており実質存在しないらしい

4：突然変異してしまった妖怪は治療する事が出来ない為殺すしかないらしい

## ソルジャーについて（後書き）

因みにソルジャー試験は肉体と精神を検査するモノで学力などは余り関係ないです

ソルジャーになる為の手術に耐えられるか、適合するかが重要な為学力は問題ではないんです

真・東方紅魔郷：2話目（前書き）

今回ジョジョネタが多数あります。気を付けて読んで下さい

## 真・東方紅魔郷：2話目

チルノ「潜入成功！さすがあたいなね」

自分が昔（博麗大結界消滅以前）描いた地図を広げてみる

チルノ「えつと・・・アレがああで・・・コレがそうで・・・つて！」

地図をぐしゃぐしゃに丸めて投げ捨てるチルノ

チルノ「こんなミミズみないな絵誰が解るかー！！」

注、チルノ自身が描いた地図です

チルノ「そもそもこの紅い館ってこんな感じだったけ？」

周りを見渡すと以前に比べ機械があちこちにみられる

チルノ「んー・・・まあいいや、とりあえずしゅっぱー」

館全体を突如振動が襲う

チルノ「うえい？！な、何事！？」

カancellor「おい！チルノ聞こえるか！！応答しろ！！」

チルノ「おお、カancellorからの通信ではないか。ではノックしてもしもーし」

カancellor「バカな事してんじゃねえ！早く脱出しろ！」

チルノ「なっ！バカとは何よ！あんたの方があたひよりバカじゃない！！」

注、チルノの方がバカです

カancellor「ふざけてる場合じゃねえ！いいか、よく聞け、今その館は浮いてるんだよ！」

チルノ「はあ？何言ってるのあんた、そんな館が宙を浮くなんて、ファンタジーやメルヘンじゃあないんだしあり得る訳ないじゃない」

カancellor「だったら近くの窓からでも外を見てみる！」

チルノ「はーやれやれ世話が焼けるわねーって、なんじゃこりゃああああ！？」

どんだん地面から離れいく光景が窓からみえた

カANCEL「ふざけてないで早く脱出しろ、一度カンパニーに戻って  
作戦を練り直すぞ」

チルノ「……」

カANCEL「どうしたんだ？」

チルノ「やられた……窓が全く動かない……」

カANCEL「何!？」

チルノ「それに」

《侵入者ハツケン、侵入者ハツケン、メイド妖精は直子二出撃セヨ》  
チルノ「熱烈な歓迎ね……」

カANCEL「なつ……任務は失敗だ!紅魔館の奴ら最初から知って  
やがったな!」

チルノ「何言ってるのよ、まだ任務は始まってもないわ」

カANCEL「お前……」

チルノ「任務を遂行する」『紅魔館を無事脱出する』両方やらな  
きゃいけないのがソルジャーの辛いところね」カANCEL「そこは辛  
い(からい)じゃなくて“つらい”な“つらい”」

チルノ「う……うるさいわね、ジョークよジョーク!」

カANCEL「……大丈夫なんだな?」

チルノ「最強の盾に不可能はない!」

カANCEL「……わかった。じゃあ帰るわ」

チルノ「え、ええー?!」

カANCEL「いや、もう俺に出来る事ないし、頑張れよ!」

チルノ「え!?!あ、うんあたい頑張るよ」

妖精 しんにゆうしやだー

妖精 やっつけろー

妖精 わー

チルノ「む、出たな妖精メイドめ」

妖精 てやー

妖精 とりやー

妖精 わー

チルノ「甘いわ！」

一閃

妖精 やーらーれーたー

妖精 あべし

妖精 んずぎやむー

チルノ「さて、今回の異変の原因をやっつけるとしようかね」

妖精 いかいやすみー

妖精 おなじくー

妖精 じゃーねー

地面にノビている（？）妖精達を後目にどんどん進むチルノ

ハイスラア！

兜割り！

ブリザド！

どんだんなぎ倒していき

チルノ「これがあの吸血鬼の部屋へ続いているという階段ね、頭を潰せばすぐ終わる……」

階段を2、3段上がった時

「久しぶりね妖精」

チルノ「その声は……！」

レミリア「私よ、レミリア・スカーレットよ。随分と調子よさそうね、妖精」

チルノ「まあね」

レミリア「あなたを殺すのは簡単だけど、誇り高い吸血鬼である私はアナタに一つチャンスをおあげるわ」

チルノ「チャンス？」

レミリア「ええ、その階段を2段おりなさい、私の僕にしてあげるわ。逆に死にたければ足をあげて階段を登りなさい」

チルノ「ふん、正義の味方を目指してる者が悪に屈する訳にはいかないわ……それにあたいにはまだ選択肢が残ってるもの……あんたに勝って異変を止めるという選択が、ね！」

レミリア「ほう、本当にそうかしら？ならば階段を登るがいい」

そう言われるとチルノは力強く一步を踏み出した

レミリア「フフフフ・・・そう、そうなの・・・階段を降りたわね。このレミリアに対して忠誠を誓いたいという訳ね？」

チルノ「!？」

“登った筈の階段が気付いたら降りている”

チルノ「な!？」

再び登ろうとするも降りている

レミリア「どうしたのかしら妖精、動揺してるわよ？」

チルノ「くう・・・あたいを・・・あたいを・・・」

何度も繰り返し返すが気付いたら階段を降りてしまっている

チルノ「あたいをバカにするな！」

大きくジャンプしてレミリアに飛びかかるチルノ

しかし

レミリア「残念、隙だらけよ？あなた」

チルノ「しま・・・！」

レミリアに吹き飛ばされ打ち所が悪かったのか気絶してしまうチルノ

レミリア「もう終わりかしら？まあいいわ咲夜、この妖精を武器を奪って牢屋にでも入れておきなさい」

そう彼女が言うつと一瞬にして現れる人間のメイド

咲夜「では、失礼します」

チルノを担ぐと現れた時と同じように一瞬にして消えるメイド

レミリア「ふふん、残念だけど今回は勝たせてもらっわよ、八雲紫・

・・・」

真・東方紅魔郷：2話目（後書き）

舞台裏

チルノが階段を登り終える瞬間

咲夜（ザ・ワールド！時よ止まれ）

そしてチルノに近づく咲夜

チルノを持ち上げて、2段下に降ろすと

自分は再び隠れて

咲夜（そして時は動き出す・・・）

チルノ「!？」

咲夜「お嬢様つたら、前に読んだ漫画の影響をすぐ受けるから・・・」

真・東方紅魔郷：3話目（前書き）

真・東方紅魔郷もいよいよ中盤です

真・東方紅魔郷：3 話目

ピピピ、ピピピ……

(何よ、うるさいわね……人が折角気持ちよく寝てるっていうのに……)

フッフ、変わらないねチルノは……

(誰よ、アンタ?)

そんな事どうでもいいじゃない。それよりもアイツにぶっ飛ばされたけど身体に問題はない?

(アイツって?)

忘れたの?チルノをグングニルでぶっ飛ばした奴よ

(あ……そうだ……あたいは確か……早く起きなきゃ……!!)

慌てちゃ駄目だよ、まずは右手が動くか確かめないと

(右……手……)

うん、その調子だよ!次は左足

(左足……!)

駄目だよ!焦らずにゆっくりと、あの時みたいな事になってたら大変だからね

(あの……時?)

大丈夫みたいだね、じゃあ……早く“起きろ!このバカ妖精!!”

チルノ「あたいの事をバカ妖精っていうな!!このっ……てアレ?ここ何処?’

飛空邸紅魔艦内牢屋

チルノ「くそ!あの吸血鬼め!’

ピピピ、ピピピ





カANCEL「さつさと出る、まだまだ先は長いぜ」

チルノ「うん、それにあの吸血鬼の力の謎も解かなきゃ」

カANCEL「力の謎？なんだそれは」

チルノ「ありのまま、さつき起きた事を話すわ（中略）というわけよ」

カANCEL「お前、それって・・・」

チルノ「でもあたいにはあいつの秘密が解ったわ。アイツの力、それはなんと」

カANCEL「（どうせ下らない事何だろうな・・・）」

チルノ「階段をエスカレーターにする程度の能力よ！」

カANCEL「ハイハイワロスワロス」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3066t/>

---

東方ファンタジー？

2011年5月19日21時50分発行